

たみこの海パックが『伝える』想い -地域の未来はきっと女性が握っている-

たみこの海パック
阿部 民子

1. 地域の概要

私たちの住む南三陸町戸倉地区は、宮城県の北東部に位置し、志津川湾に面している。志津川湾は、複雑に入り組んだリアス海岸特有の地形で、湾内では養殖業や漁船漁業が営まれている(図1)。

東日本大震災以前、約2,400人だった戸倉地区の人口は、令和4年(2022年)12月末現在で、約1,300人まで減少した。

一方で、震災後、南三陸町は見事に復興した。平成29年(2017年)にさんさん商店街が、令和4年に震災伝承館がオープンし、多くの人を訪れている。

また、南三陸町では平成27年(2015年)にFSC認証、翌年にASC認証を取得した。戸倉出張所カキ部会は、カキ養殖において国内で初めてASC認証を取得したが、令和元年(2019年)には農林水産祭において天皇杯を受賞した。

さらに、平成30年(2018年)には志津川湾がラムサール条約湿地に登録され、自然循環の大切さを広く発信している世界に誇れる町となった。



図1 戸倉地区の位置

2. 漁業の概要

宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所には、現在208名の漁業者が所属しており、ギンザケ、マガキ、ワカメなどの養殖業、定置網、刺網などの漁船漁業、アワビ・ウニなどの採介藻漁業が営まれている。令和5年度(2023年度)の水揚げ金額は20億5,100万円で、このうち約9割を養殖業が占めており、品目別ではギンザケが最も多く、次いでマガキ、ワカメの順となっている(図2)。

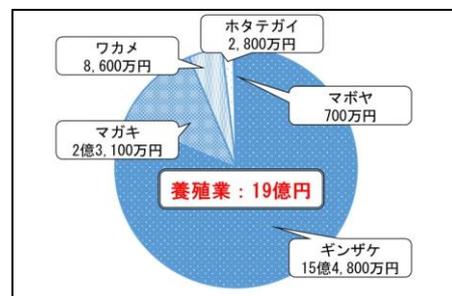


図2 令和5年度：戸倉出張所の養殖品目別の水揚げ金額

3. 企業の組織と運営

平成24年(2012年)10月にWEBサイト「たみこの海パック」を立ち上げ、通信販売を軸とした海産物の小売業を営んでいる。

夫と長男はおもに養殖漁業に従事しており、我が家で水揚げした海産物は、漁協や自社サイトで販売している。

また、町内加工場の商品を詰め合わせたセットは、ふるさと納税の返礼品や企業ギフトとしても利用されている。

現在4名の女性スタッフが働いており、漁業体験ツアー、海藻ふりかけワークショップも実施している。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

(1) 東日本大震災による被災

震災以前は、夫と一緒に船に乗り、養殖業を共に頑張ってきた。震災ではほぼ全てが流されたが、夫が沖出ししていた漁船1艘は被災せずに残った。しばらくは船に乗れるような心境ではなく、強い余震が続くたびに当時の恐怖がよみがえり、早く町から出たいとさえ思っていた(図3)。

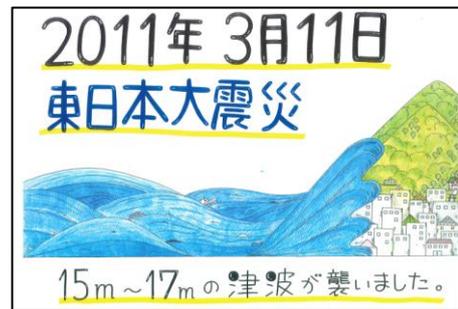


図3 東日本大震災で全てが大きく変わった

(2) 通信販売の立ち上げを決意

これまでは家業をやっているのが小さな幸せだと思っていた。震災以前は、知り合いに我が家で水揚げした海産物の詰め合わせを送っていた(図4)。

震災で多くを失い、途方に暮れる毎日を過ごす中、「何か海に関わる仕事をしなくては。でも、とても海に出る気持ちにはなれない。」と悩んでいたところ、ボランティアの方から「昔やっていた経験を活かしてみたら？」と言われた。同じ頃、三男が国の補助事業があるとの話を聞いてきた。息子の「おっかあ、できるんでないの？やってみたら？」の一言が当時の私の心に響いた。夫も「やれんだったらやってみろ～」と背中を押してくれた。ようやく自分の居場所が見つかったような気持ちだった(図5)。



図4 たみこの海パックの原点



図5 通信販売の立ち上げを決意

5. 研究・実践活動の状況および成果

(1) たみこの海パック立ち上げ

起業支援は雇用創出のための支援だったため、建物や備品は購入できなかった。そのため事務所兼作業場とするためのプレハブはわずかな資金で購入し、事業に必要なパソコン、冷凍庫などの備品は商工会議所に協力をいただき、借入をして購入した。

平成24年(2012年)10月に事務所が完成し、無我夢中でたみこの海パックをスタートさせた(図6)。

最初は経営の基礎から学び、事業計画作成、補助金申請など、これまで縁遠かった作業の連続であった。パソコンの基本操作、WEBサイトの作成、SNSによる情報発信もボランティアの方に一から教えていただきながら必死に事業を進めた。

震災後は、水産加工場の再興が早く、4社の加工場から商品を仕入れ、詰め合わせを販売した。今では、13社の加工場と漁業者からも商品を仕入れ、たみこの海パックで販売できるようになった。

その後、養殖業ではワカメの生産が始まり、ワカメの袋詰めも行いながら、新たな販路開拓に奔走した。海藻類は県内外のスーパー、産直などで販売しており、志津川湾で水揚げされたヒジキ、フノリなどにはラムサール条約ロゴを貼付し、環境保全にも役立てている(図7)。

立ち上げから約1年、海の再生や借入金の不安から心が押し潰され一人涙する日々が続いたが、『家族の支え』と『人との繋がり』で乗り越えることができた。(図8)。

(2) 子育て世代の雇用

初めは子育て中のママを紹介してもらい、子供と一緒に出勤し頑張ってくれた。

また、「仮設住宅を出て、働きたい!」と職場を探していたママや、県外から嫁入りしてきた女性からも、「短時間でも良いから働かせてほしい」と声を掛けられ雇用したことがきっかけで、時間に融通の利く女性の雇用について意識するようになった。



図6 たみこの海パック HP



図7 ラムサール条約ロゴによる環境保全



図8 『家族の支え』と『人との繋がり』

特に田舎は親世代との同居が多い。自分がかつてそうだったように、自分の時間を持ちたい、子供に合わせた働き方をしたい、と感じている子育て世代のママたちが多かったのである。

現在の雇用条件は、土日祝休みで、短間勤務もOK。「短時間でも女性が生き生きと働ける職場作り！」をモットーに、スタッフには都合の良い時に来てもらうようにしている(図9)。

おもな仕事内容は、WEBサイト運営、商品梱包、発送作業、体験事業補助などである(写真1)。中でも新たな商品開発については、女性スタッフ内で意見を出し合っており、「毎日の料理で少しでも時短調理したい!」という子育て中のママたちならではの発想から開発された商品は、現在も好評販売中である(写真2)。



図9 子育て世代の雇用創出



写真1 商品の梱包作業を行う女性スタッフ



写真2 女性スタッフが開発したたみこの楽ちんわかめ

(3) 認知度向上・販路拡大による販売促進

女性として復興からの起業という点で珍しかったのか、マスコミからの取材が増えた。地道な営業活動、マスコミ報道などにより認知度も徐々に上がり、売上金額を伸ばすことができた。コロナ禍では通信販売がブームとなり、さらに売上は伸びた。

売上ピーク時の令和3年(2021年)には、震災前平均の約18倍以上となる売上を達成した(図10)。

お客様からの「美味しい!頑張っ!」とのお声掛けがとても嬉しかったし、心の励みとなった。

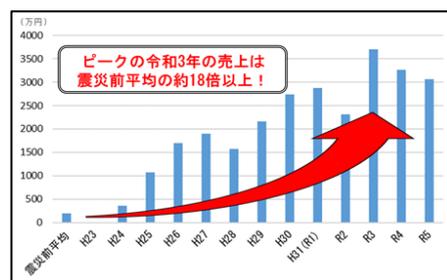


図10 年間売上金額の推移

(4) 漁業体験ツアー

私は、震災で全てを失い、ゼロから漁業を復興させた漁業者たちを見てきた。特に国際認証取得は日本初の取り組みで、この背景を伝えたいと思った。また、海を守る大切さ、生産者がいるからこそ安心して食べられることなど、店頭では伝わらない、かけがえのない価値を消費者に伝えたいと感じ、『伝える役』になろうと決心した(図11)。

震災で残った漁船1艘を利用した漁業体験ツアーを平成25年(2013年)から2年間無料で実施した(写真3)。体験に来てくれた方に海産物の育つ様子を見せ、漁業者の取り組みや想いを紙芝居で説明すると、海を守る大切さが伝わり、感動してもらえた。



図11 決心し『伝える役』に



写真3 漁業体験ツアー

(5) 海藻ふりかけワークショップ

海藻ふりかけワークショップは、規格外の海藻を無駄にせず活用するために考案した体験イベントである(写真4)。

町のこと、海藻のこと、海を守る大切さを紙芝居で学んでから、刻んだ海藻と特製タレを混ぜ、しっとりしたふりかけを作る。

天候に関係なく安定して実施でき、美味しく楽しく学べるとして、学校や企業で人気を集め、海外からの参加者も増えた(図12)。

さらに、廃棄量も大幅に減り、収入へと変わった。

一方で、コロナ禍で参加者が減少したため、オンライン用に一人分の体験キットを開発した。キットを事前送付することで、紙芝居やふりかけ作りをオンラインで体験できるようになった(図13)。



写真4 海藻ふりかけ
ワークショップ



図12 英語版紙芝居



図13 オンラインによる
海藻ふりかけワークショップ

その結果、ピーク時の令和4年にはコロナ禍初期の約6倍以上となる675人の方が参加した（図14）。

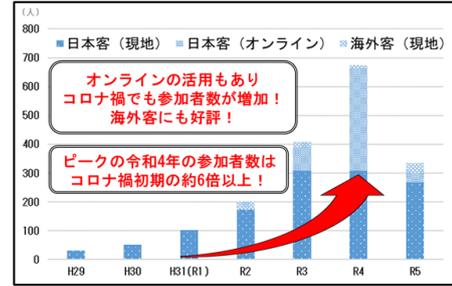


図14 海藻ふりかけワークショップの参加者数推移

6. 波及効果

令和4年、東北6県の企業・団体による優れたSDGsに関する活動を表彰する大会として第1回とうほくSDGsアワード2022が初開催され、たみこの海パックの取り組みで大賞を受賞した（図15）。

大賞の受賞は、町に多くの方が訪問してくれるきっかけとなり、町のPRにも貢献することができた。

小さな事業所でも、このように評価されたことは大変光栄であり、これまでやってきたことが決して無駄でなかったと、心から嬉しく感じた。



図15 とうほくSDGsアワード大賞受賞

7. 今後の課題や計画と問題点

近年の海水温上昇や担い手不足など、漁業は大きな課題に直面している。まずは現実を受け入れ、出来ることを『続ける』ことが大切である。そのためには、『人との繋がり』が何より大切で、消費者の方々には海の状況だけでなく、海産物を守り、食に繋げる大切さを知ってもらいたい。そのためにもこれからも『伝える』ことを『続けて』いきたい（図16）。

また、『自分の時間が持てること』は『人の豊かさ』だと思う。女性が働きやすい環境にすることで、自分の時間を持ち、楽しんで、やりがいを持って仕事をしてほしい。『小さな幸せ』を積み上げていけば、やがて『大きな幸せ』に繋がると信じている。



図16 これからも伝え続けたい

私は、若い後継者が生き生きと輝き、女性が生き生きと働くことができる『南三陸町の未来』を目指したい。『浜の活気』と『笑顔』は、必ず南三陸町を盛り上げてくれるはずである。

そのためにこれからも、私は伝え続けたい。

『地域の未来はきっと女性が握っている』と信じて。(写真5)。



写真5 『地域の未来はきっと女性が握っている。』